

# 『撰津名所図会』の利用法

— 大田南畝の名所見物 —

## 中尾和昇

はじめに

手前味噌で恐縮だが、二〇一四年三月、『大阪都市遺産研究叢書別集5 名所図会でめぐる大阪—撰津I—』（関西大学大阪都市遺産研究センター〈非売品〉）を刊行した。本書は『撰津名所図会』（秋里籬島作・竹原春朝斎ほか画、寛政八・十年「一七九六・九八」刊）の記事を、「祭祀・法会」「信仰」「民俗行事」「興行」「商業」「産物」「名勝」の七種に分類し、抜粋・翻刻したもので、近世大坂の名所旧跡を多角的に捉えることを目的としている。

今回、本書を編集するにあたって、『撰津名所図会』を読み直してみたが、その圧倒的な情報量に、あらためて驚かされた。竹原春朝斎・丹羽桃溪らによる美麗な挿絵は勿論のこと、名所

旧跡に関する精緻な考証は、娯楽読み物と言ってよく、旧来の名所記・道中記とは一線を画している。なるほど、上方で〈図会もの〉<sup>〔1〕</sup>と呼ばれる読本が続出するのも頷ける。ただ、『撰津名所図会』を含む一連の「名所図会」シリーズは、大本（タテ約27cm、ヨコ約19cm）という文字通り大型の書物であるため、携帯に不向きであったことは否めない。だとすれば、「名所図会」はどのような方法で利用されていたのか。

西野由紀「先達はあらまほしき—「名所図会」と旅人—」（『国文学論叢』52、二〇〇七年二月）は、清河八郎や萩原貞宅の京都遊覧を例として、以下のように定義している。

彼ら（清河八郎・萩原貞宅—筆者注）の利用法とはつまり、土地に不慣れな場合、まず「名所図会」によって土地の情報を得、その予備知識をもとにして現実の京都に遊ぶ。そ

の際の留意点などを「名所図会」の本文の記述や挿図から心得として学び、旅を実践していたのである。

つまり、机上で予備知識を得るという方法が一般的だったようである。しかし、具体的な利用に言及した先行研究は殊の外少ない。内海寧子「明和―享和期の大坂における墓碑探訪と『掃苔文化』」(『史泉』101、二〇〇五年一月)が、ほぼ唯一のものといってもよいだろう。内海氏は、大田南畝が在坂時に『撰津名所図会』を頻繁に利用していることを、彼の在坂日記『蘆の若葉』の記述をもとに分析している。ただし、その指摘は、日記に「名所図会」などの表記が確認できるものに限られており、必ずしも十分であるとは言えない。

そこで本稿では、『蘆の若葉』の記事を詳細に分析することで、南畝が名所見物の際に、『撰津名所図会』をどのように利用したのかを明らかにする。そのうえで、「名所図会」という書物が果たした役割についても言及したい。

## 一、大田南畝と『蘆の若葉』

大田南畝は、言わずと知れた江戸文壇の重鎮であり、今さら事新しく述べるまでもないが、寛政改革後の動向には注意を払

う必要がある<sup>2</sup>。寛政六年(一七九四)、狂歌壇の中心から退いた南畝は、「学問吟味登科済」(人材登用試験のこと)に首席で合格。同八年(一七九六)には、支配勘定(勘定所で実務を担当する勘定奉行配下の役人)に任用され、官版『孝義録』の編纂などに携わっている。そこでの才能が認められたのか、享和元年(一八〇一)には、銅座詰役人として、一年間を大坂で過ごすこととなった。その時の日記が、上述した『蘆の若葉』である。ちなみに、同年二月二十七日に江戸を出発し、三月十一日に大坂に到着するまでのことは、『改元紀行』に活写されている。

南畝の在坂生活については、飯倉洋一「大田南畝の在坂生活」(高田衛編『論集近世文学』5 秋成とその時代) 勉誠出版、一九九四年十二月)に詳しい<sup>3</sup>。それによれば、多忙な公務<sup>4</sup>の間を縫っては、知友とともに名所を訪ね歩き、詩酒交歓を楽しんでいたという。南畝の知友とは、馬田昌調・佐伯重甫・田宮仲宣(蘆橋庵)・常元寺順宣律師の四人に加えて、木村兼霞堂や上田秋成といった面々である。とくに、南畝の役宅(南本町五丁目「通称米屋町」)近くに居を構えていた昌調とは昵懇の仲で、「親類同然」の「心易」い関係にあったという<sup>6</sup>。ただ、飯倉論文は知友との交遊に紙幅の大半を費やしているため、名所見物についての記述は少ない。また、冒頭で挙げた内海論文は、訪碑記

事が中心であるため、名所見物そのものについては、概略を述べるにとどまっている。よって、まずは『蘆の若葉』の記事を通して、名所見物の全体像を把握するところからはじめたい。

名所見物の記事を確認するまえに、『蘆の若葉』の書誌事項について、『大田南畝全集』第八巻（岩波書店、一九八六年四月）

「解説」（揖斐高氏）などを参考に、簡単に説明しておく。本書は南畝自筆本の存在が不明であるものの、宮内庁書陵部本・無窮会図書館神習文庫本・東京大学附属図書館本・大阪市立中央図書館本・関西大学図書館本・肥田皓三氏所持本の六本が知られている。そのうち、全集の底本として使用された宮内庁書陵部本は、原初の形（三冊「他本はすべて六冊」）をとどめ、南畝による後年の補記が見られる善本である。各冊の末尾の記述をもとに、全三冊の執筆時期をまとめると、上冊が享和元年三月二十一日から四月十七日、中冊が四月末から七月三日、下冊が七月十日から同二年一月十一日となる。なお、序文の執筆日は五月十三日（竹酔日）である。

本書は南畝の在坂日記といわれるが、公務に関する記述はほとんどなく、名所見物の様子を子細に記した探訪日記というべきものである。花見・祭礼見物・訪碑など、目的はさまざまだが、揖斐氏も指摘するように、驚くほど多くの名所を巡り歩い

ている。試みに、『蘆の若葉』の記事に見られる、おもな探訪地を日付順に並べてみると、以下のようになる。<sup>8)</sup>

- 3月21日 難波御堂・座摩社・津村御堂・御霊社
- 3月22日 道頓堀大芝居・千日寺・法善寺・竹林寺（法善寺横）・自安寺・瑞竜寺
- 3月25日 上天神（福島）・野田藤・妙徳寺・久安寺・了徳院・曾根崎新地・露天神・法清寺・神明宮・大融寺
- 3月26日 真言坂・桜本坊・弁天社・北向八幡宮・生玉社・月江寺・四天王寺・松屋（茶屋）・崇峻天皇社・庚申堂・一心寺・茶臼山・新清水寺・浮瀬（酒樓）・勝鬘院・毘沙門堂・家隆卿塚・浄国寺
- 3月28日 広田社・今宮社
- 3月29日 高津社・円珠庵
- 3月30日 四ツ橋・和光寺・竹林寺（衢壤島）・茨住吉社・波除山・三社宮・天満宮御旅所
- 4月5日 天満宮・興正寺・川崎御宮・母恩寺・十五社・鶴塚・桜宮・大長寺・京橋・神明宮
- 4月8日 孔雀茶屋・遊行寺（芭蕉墓あり）・合法辻・四天王寺・清寿院（関帝堂ともいう）・土塔宮・万代

- 池・堀越社・安井天神・福屋（茶屋）・音羽屋  
（酒楼）・油煙斎貞柳墓・一本亭芙蓉花碑
- 4月11日 座摩社・津村御堂
- 4月14日 三津八幡宮・難波牛頭天王社・月江院・瑞竜寺・  
法善寺（三勝墓あり）
- 4月15日 庚申堂・稚寺・多門院（薬店）
- 4月16日 国分寺・正徳寺・鶴満寺・源光寺
- 4月17日 川崎御宮
- 4月21日 森宮・真田山（仁徳天皇宮・稲荷社あり）・興徳  
寺・大応寺・心眼寺・天然寺・誓願寺（中井整  
庵墓・西鶴墓あり）
- 4月26日 天下茶屋（是齋薬店あり）・安養寺・住吉新家・  
住吉社
- 5月5日 鷲塚・源立寺・崇禪寺・江口・柴島
- 5月20日 難波御堂
- 5月23日 安治川・安治川橋・船番所
- 5月28日 奥天神・大海神社・住吉社（当日は御田植神事）
- 6月4日 御船屋・滯標
- 6月13日 難波牛頭天王社（当日は夏祭の夜宮）
- 6月15日 三津八幡宮（当日は夏祭）・三津寺
- 6月16日 難波橋（当日は御霊社の夏祭の夜宮）
- 6月17日 御霊社（当日は夏祭）
- 6月20日 津村御堂
- 6月21日 上難波仁徳天皇宮（当日は夏祭）
- 6月22日 座摩社（当日は夏祭）
- 6月24日 難波橋（当日は天満宮の夏祭の夜宮）
- 6月25日 大江橋付近の岸辺（当日は天満宮の夏祭）
- 6月29日 住吉新家・住吉社（当日は住吉社の夏越大祓）
- 7月7日 茶湯地藏・豊津稲生社・仁徳天皇宮・味原池・  
産湯清水・稲荷社・姫古曾社・岩船旧跡・猪甘  
津橋・漁父淵・茨律大明神・岡山・舍利寺・国  
分寺・相坂清水
- 8月13日 東光院・天真庵
- 8月15日 興正寺・鍋島藩蔵屋敷（当日は稲荷祭）
- 9月3日 大乘坊・松虫塚・王子社・北畠顕家墓（大名塚  
ともいう）・経塚・播磨塚・万代池・難波屋（茶  
屋、笠松あり）・関帝堂（亀林寺境内）・住吉神  
輿火替所・妙国寺・常楽寺・乳守遊郭・酒楼（蓮  
如上人筆の招牌あり）
- 9月13日 住吉社（当日は相撲会）・丸屋（酒楼）

○ 9月15日 四天王寺（当日は六時堂念仏会）

○ 9月25日 天満宮（当日は秋祭）

○ 9月29日 是齋薬店・閻魔地藏尊・住吉社（当日は玉出島

御祓）

○ 10月14日 食氏山荘（春日出新田にあり）

○ 10月22日 五条宮・寿法寺（栗柯亭木端墓あり）・法住寺

○ 10月23日 商家（天満宮前にあり）・興正寺

○ 10月25日 四貫島（観音堂・住吉社あり）・西光寺・宝泉寺

○ 12月5日 四天王寺（落雷により焼失）

○ 12月23日 広教寺・博労淵

まさに、東奔西走といっても過言ではないスケジュールであるが、ここから窺える特徴をいくつか指摘しておきたい。まず一つは、時期によって回数や目的が異なる点が挙げられる。赴任して間もない三月から四月にかけては、連日のように名所を訪れているが、多忙な公務ゆえか、四月下旬から五月にかけては極端に回数が減る。六月は夏祭りの時期ということで、各社の祭礼に出掛けている。また、六月以降になると、飯倉論文が指摘するように、単なる名所見物というよりは、知友との交遊が主たる目的となっている。食氏の山荘を訪れた十月十四日は、その典型例といえる。二つめは、日によって巡覧する地域を限

定している点である。例えば、三月二十五日の場合、福島・野田・曾根崎といった近接した地域を中心に行動している。三月三十日や四月八日なども同様である。とはいえ、これほど多くの名所を巡覧する南畝が、相当な健脚であったことは想像に難くない。このような名所見物の全体像をふまえたうえで、次章以降、『蘆の若葉』の具体的な記述について見ていく。

## 二、名所案内記類の利用

従来指摘されているように、南畝は『蘆の若葉』を執筆するに際して、『撰津名所図会』をふくむさまざまな名所案内記類を参照している。最近では、内海論文が頻度順のリスト化を試みており、全体像が明らかになりつつある。リストに基づいて引用書目を並べると、『撰津名所図会』『撰陽群談』『難波丸』『畿内治河記』『難波鑑』『浪花の梅』『泉州志』『堺鑑』『みをつくし』の九点となる。だが、このリストは、本文に書名が明記されているものに限られており、実際の利用という観点から見た場合、再検討の余地があると思われる。そこで、あらためて南畝が利用した名所案内記類について考えてみたい。なお、本稿の主たる考察対象である『撰津名所図会』の利用実態について

は、次章に譲ることとする。

はじめに、『撰津名所図会』に次いで引用頻度の高い、撰津国  
の地誌『撰陽群談』（岡田後志著、元禄十四年「二七〇一」刊）  
について見ていく。内海論文のリストが示すように、「撰陽群  
談」という表記は計六回登場する。例えば、三月二十五日に訪  
れた野田藤の記述の最後に、「撰陽群談二真入庵トアリ」とある  
のは、『撰陽群談』巻第十七・雑類「野田藤」項の「同郡（西成  
郡―筆者注）野田村真入庵にあり」という記述をふまえたもの  
である。また、四月二十一日に真田山を訪れた際には、

こ、は慶長・元和の古戦場にして、撰陽群談にも、真田古  
城東生郡小橋村ノ地ニアリ。慶長・元和年中、真田左衛門

在陣之所也。越前出張古城、同郡同所玉造ノ南ニアリ。慶

長・元和中、伊達羽柴越前守大崎少将正宗在陣ノ所ナリ。

加賀出張古城、同郡同所ノ地ニアリ。慶長・元和年中、加  
賀大納言菅原利家卿在陣之所云々、などかけるは此わたり  
なるべし。

とあるが、傍線を付した箇所は、『撰陽群談』巻第九・城郭部の  
「真田古城」「越前出張古城」「加賀出張古城」項を丸取りしたも  
のである。

このように、『撰陽群談』の利用は、ほぼ間違いないと思われ

るが、「撰陽群談」という表記がなくても、本書を利用している  
形跡があるので、注意が必要である。例えば、三月二十一日に  
難波御堂を訪れたときの記述に、「慶長年中、親鸞上人十一世頭  
如上人の法孫、教如上人の草創なりとぞ」とあるが、これは『撰  
陽群談』巻第十二・寺院の部「難波御堂」項の「後陽成天皇御  
宇、慶長年中の草創。東本願寺御堂也。宗門開山親鸞聖人十一  
世頭如上人の法孫、教如上人の開闢たり」をふまえたものとな  
っている。『撰津名所図会』にも開創の記述はあるが、これほど  
の一致は見られない。ちなみに、この日に訪れた津村御堂・御  
霊社の記述についても、『撰陽群談』の利用が確認できたが、紙  
幅の都合上省略する。

つぎに『難波丸綱目』（志田垣与助著、延享五年「二七四八」  
刊）。『蘆の若葉』では、一貫して「難波丸」との表記が見られ  
るが、元禄九年（一六九六）刊の地誌『撰州難波丸』の内容を  
増補したもので、正確には『<sup>増補</sup>難波丸綱目』と呼ばれる。<sup>12</sup>『蘆  
の若葉』に本書の利用が見られるのは、九月三日に阿倍野・住  
吉・堺を訪れた時のみで、管見の限りでは、当該箇所以外に確  
認できない。例えば、松虫塚の記述に「難波丸には、古今の序  
に、松虫の音に友をしのびてといへることは故事にとりなし、  
此野辺の事に作れる謡あるにより、近き世の人いひならはせる

なるべしとなり」とあるのは、『難波丸綱目』第五冊「松虫塚」項の記事を丸取りしたものである。以下、大名塚・播磨塚・妙国寺の記事も、「難波にみえたり」「難波丸には」「難波丸にはしるせり」とあり、同様の方法をとる。

『畿内治河記』（新井白石著）は、貞享四年（一六八七）に河村瑞賢が行った、安治川開削工事の功績を記したものである。三月三十日、波除山を訪れた南畝は、安治川について「貞享年中、河村瑞賢なるもの新川をほりて安治川と名付、土砂をあつめて山となし、川口をたすく」と記している。この記述自体は、『撰津名所図会』巻四「安治川」「瑞見山」項に拠っているもの<sup>13</sup>で、その直後に「くはしくは畿内治河記にみえたり」とあるの<sup>14</sup>で、同書の記述も意識していた。その日の夜、南畝は『畿内治河記』を読んで確認し（「此夜、畿内治河記をよむ事一過」）、およそ二ヶ月後の五月二十三日、再び安治川を訪れたときには、『畿内治河記』に、<sup>甲子</sup>「貞享二月十一日、先於二九条島一起役、直鑿三島中一以開二道新河一、自二九条一及三福島一、表約一千丈広三千余丈、使三河流直達于海一、此昔治レ水始レ於冀亮二之遺意也といへるは此所なり」と記している。ちなみに、南畝は「三千余丈」とあるべき所を「三十余丈」と誤写している（傍点筆者）。

『難波鑑』（一無軒道治著、延宝八年「一六八〇」刊）は、元

旦から大晦日にいたる大坂の年中行事を記した地誌である。本書の利用は、三月二十一日の法善寺、六月十三日の難波牛頭天王社の記事に見られる。法善寺の記事「難波鑑云、抑此法善寺と申せしは、寛永年中の比ほひより千日の念仏をとりたてしより、人こぞりて千日寺といへり」は、『難波鑑』第四「法善寺墓参」項から、難波牛頭天王社の記事「難波鑑に云、六月十四日、難波の宮にまうで、御湯まいらするばかりにて、神輿はまつらず。むかしは平野明神を上る宮といひ、当社をば下の宮といひて、さかへ給ひし時は神輿を出し祭りけるよし。今は神さびて、そのさたまなし云々」は、同書第三「牛頭天皇祭」項から、それぞれ引用している。南畝は、座摩社や天満宮の夏祭りにも足を運んでいるが、管見の限りでは、『難波鑑』を利用した形跡は認められない。

『浪花の梅』（白縁斎梅好著・玉縁斎寿好画、寛政十二年「一八〇〇」刊）は、大坂の名所・名物を紹介した狂歌絵本である。本書の利用は、五月二十八日に大海神社を訪れた際の記述「ちいさき溝のはしをすぎて門にいれば、大海神の社あり。此社に古き手水鉢あり。慶安年中の物ならんと、浪花の梅といへるふみにしるせしゆへに、いづくならんとみるに、社の右のかたにあり」から確認できる。これは、『浪花の梅』三之巻・七十の



〔同（住吉―筆者注）大海神御社内の手水鉢は、慶安年中の作なり。凡百五十余年になる古石なり〕をふまえたものである。なお、同書に「慶安年中の作」と記されるので、南畝は刻銘を調べてみたものの、年代の特定には至らなかつたようである（「年号さだかならず」とある）。

泉州・堺の地誌『泉州志』（石橋直之著、元禄十三年「一七〇〇」刊）および『堺鑑』（衣笠一閑著、貞享元年「一六八四」刊）については、九月三日の妙国寺三重塔の「かゝる見ものなるを、泉州志・堺鑑はた難波丸・名所図会などいへるものに書のこせるぞうらみなる」という記述から窺えるが、南畝自身「うらみなる」と嘆じているように、両書に三重塔の記述は見られない。『みをつくし』（浪華散人著、宝暦七年「一七五七」刊<sup>15</sup>）は大坂新町の案内記で、三月二十六日に浄国寺墓地内にある夕霧墓を訪れた際の記述に、同書の利用が確認できる。少し長くなるが、該当箇所を引用する。

これは寛文十二年、都柳町より此地に下りて扇屋四郎兵衛が抱時にてよみに下れるめきける遊女なり。①此地の太夫なるもの二人禿はつれたれども、引船女郎をつる、事なし。此夕霧より引舟女郎を一人づゝつれしとぞ。②延宝五年の秋の比より病にふして、翌年の春死せしといふ。③藤屋伊左衛門扇屋夕霧阿波鳴戸

といふ浄瑠璃あり。此伊左衛門といふ事、あとかたもなきつくり事也。④此浄瑠璃に阿波大臣といふものあり。その比の大尽に大坂阿波屋何某といふもの夕霧にふかくなじみ、病の中にもよそながら世話せしとぞ。九軒町揚屋吉田屋喜左衛門が客なり。⑤其比かぶき芝居に、坂田藤十郎、同年二月三日より夕霧名残の正月といふ名題にて、藤十郎伊左衛門にて、けいせい買の狂言大にはやりけり。⑥宝永六年藤十郎死するまで、夕霧の狂言十八度までことごとくしくはやりしとなん。

つぎに、傍線を付した箇所に対応する『みをつくし』の該当箇所（夕霧の事并引舟初発）を抜き出してみる。

- ①当津の太夫職、二人禿はつれたれども、引船女郎を連たる事なし。此夕霧より引舟女良を一人宛連る、是ははじめなり。
- ②延宝五年の秋の比より病氣にて：翌延宝六年正月六日といへるに病床に死す。
- ③扇屋伊左衛門阿波鳴戸といへる音曲の作り物有。此伊左衛門といふ事、跡かたもなき事也。
- ④此趣向の内に阿波の大臣といへること有。：其比の大臣に大坂阿波屋某とて、大分限の人あり。此夕霧にふかく馴染、病中も殊の外深切なる世話をよそながらして、死たる



と聞より、なをく厚恩をかけけるとぞ。則九軒町揚屋吉田屋喜左衛門方の客なりしよし。

⑤ 其比、かぶき芝居の立役元祖坂田藤十郎、同年二月三日より、夕霧名残の正月と云外題にて、則藤屋伊左衛門に藤十郎なりて、けいせい買の狂言にて、大にはやりけり。

⑥ 延宝六年より、坂田藤十郎死去せし宝永六丑年迄、夕霧狂言を十八度出せり。ことく大当りにてありしとぞ。

一見してわかるように、該等箇所の記事は、『みをつくし』の文章を切り取り、再構成したものである。なお、引用した夕霧の記事の少し前に、「浄国寺といふ寺に遊女夕霧が墓ありといふ事、かねてき、つれば」とあるが、これも同書の「法名花岳芳信女と号、今に浄国寺に件の石塔ありて、扇屋一統絶ず年回を執行する也」との記事をふまえており、南畝がここから情報を得て、浄国寺を訪れたことを意味している。

ここまで、名所案内記類の利用実態について見てきたが、『撰陽群談』の利用例で指摘したように、書名を明記しない場合がほかにもある。例えば、九月三日に安立町の難波屋を訪れた際、名物の笠松について「元文三年、此松のかたを梓にちりばめしに、松のたかさ一丈、東西十五間半、南北拾八間斗としるせり」と記すが、これは笠松を描いた一枚摺「住吉難波屋松の図」<sup>16)</sup>



【図1】「住吉難波屋松の図」

(関西大学図書館蔵)



【図2】「攝泉塚広普山妙國寺蘇鉄の図」

(関西大学図書館蔵)

の記述「松高<sup>サ</sup>一丈、東西拾五間半、南北拾八間計」を引用したものである。また、同じ日に妙國寺の蘇鉄を見物した際にも、「一<sup>ト</sup>根にして地上に出る事二十三本、大なる枝三十九本、小なるは十八本、わたり東西三丈九尺となん」とあるが、これも蘇鉄を大きく描いた一枚摺「攝泉塚広普山妙國寺蘇鉄の図」【図2】<sup>17)</sup>の記述「一<sup>ト</sup>根にして地上出る事、大小廿三本、大枝三十九本、小枝八十八本：わたり東西四丈貳尺」を引用したものと考えられる。ただし、傍点部分は単なる誤写と考えられるものの、傍線で示したように、東西の長さが異なるので、南畝が実際に見たのは、これよりも前に摺られたものであろう。いずれにせよ、こういった例は、まだまだ多くあると思われるが、それらの指摘については今後の課題としたい。

### 三、『撰津名所図会』の利用法

前章で述べたように、南畝は『蘆の若葉』の記述において、『撰陽群談』や『難波丸綱目』といった名所案内記類や、名木を描いた一枚摺などを多く利用しているが、なかでも『撰津名所図会』の利用頻度は他を圧倒している。以下、『蘆の若葉』における『撰津名所図会』の利用について見ていく。

はじめに、「名所図会」との表記が見られる場合について考える。例えば、四月二十六日に住吉社を訪れたときの記述に、「うしろにさのぬしの杜あり。大きな杉の木のかれたるは、近き比寛政三年の八月廿日の暴風に折れし神木也とぞ。こゝを高天原といふよし、名所図会にはしるせり」とあるが、これは『撰津名所図会』巻一「五所前」項の「…こゝを高天原ともいふ。…此地に年古りし榎樹の大木あり。近年寛政三年亥八月二十日暴風に吹き倒されて、今纔に朽株残り」との記述をふまえたものである。同様の例は多いが、なかには注意が必要な部分もある。例えば、先ほども挙げた九月三日の妙国寺三重塔の記述に「泉州志・堺鑑はた難波丸・名所図会などいへるものに書のことせるぞうらみなる」とあるが、ここでいう「名所図会」は『和泉名所図会』と考えるのが自然であろう。実際に『和泉名所図会』で確認したところ、三重塔の記述は見られなかった（挿絵のみ）。

また、『撰津名所図会』を用いて名所考証を行っている部分もある。例えば、四月十四日に難波牛頭天皇社を訪れた際には、「末社多く、中に祇園三社頗梨采女社、抱瘡守護神あり。名所図会に采女社とあるは誤りなり」と述べ、『撰津名所図会』巻三「難波牛頭天皇社」項の「末社、八王子祠・稲荷・靈符神・天満宮・

歡喜天・采女宮あり」という記述の誤り（頗梨采女「はりさいじよ」と采女「うねめ」を混同している）を指摘している。同様の例は、三月二十三日の瑞竜寺の記事にも見られる。また、その名所案内記類をふくめて、さらに踏み込んだ考証を行っている箇所が、九月三日に阿部野の塚群を訪れた際の記事から窺える。例として、先ほども挙げた松虫塚の記事を示す。

右のかたの田圃の中に、一もとの松あり。松虫塚といへる碑をたつ。道の入口に清円といへる字を刻める碑あるは、此碑たてし人の名なるべし。此塚の事さだかならず。難波丸には、古今の序に、松虫の音に友をしのびてといへることばを故事にとりなし、此野辺の事に作れる謡あるにより、近き世のいひならはせるなるべしとなり。撰陽群談には、所伝に云、古ある人二人伴ひて此野をすぐ。折ふし秋も半にて、月さやかなるに、松虫のこへおもしろき方を慕ふ。一人は跡にのこりて草の筵にふしぬ。暫の間もなかへり来ざりければ、又一人も跡をたづねてこゝに來り見れば、草にふして死しぬ。なく／＼土中にうづみて、松虫塚と名づけて世に伝ふといへり。松虫の音による事、古今集の序にたよりに謡に作たるによる歟とあり。近比の名所図会には、むかしの官女の塚なるべしといへり。いづれにもよし有事

なるべし。

南畝は、松虫塚にまつわる逸話を、『撰陽群談』『難波丸綱目』『撰津名所図会』の三書から見出し、それぞれの説を掲げている。ただ、傍線で示した最後の部分に「いづれにもよし有事なるべし」とあるように、結論は出なかったようである。

このほか、『蘆の若葉』の記事には、「名勝図会」と表記される場合もある。一見すると『住吉名勝図会』（秋里籬島著・岡田玉山画、寛政六年〔一七九四〕刊）が想起されるが、記述内容から考えて、これも『撰津名所図会』を指していると考ええるべきである。例えば、三月二十八日に今宮村を訪れた際の記述に、「此今宮村に朝役神役といふものあり。名勝図会に委し」とあるが、これは『撰津名所図会』巻三「広田社」項の「此今宮邑に朝役神役といふ事あり。いにしへより今に至る迄、怠慢なく毎歳正月御厨子所の挙によつて、大内へ鮮鯛なまな二尾調貢す：」による。九月十五日の四天王寺六時堂念仏会、同月二十九日の住吉祭の記事も同様である。

一方で、先ほどの『撰陽群談』と同様、「名所（勝）図会」の表記が見られない場合がある。今回、『蘆の若葉』と『撰津名所図会』の記述を詳しく比較したところ、「名所（勝）図会」という表記がなくとも、『撰津名所図会』を利用している箇所のはう

が、むしろ多いことがわかった。例えば、三月二十六日の北向八幡宮の記事に、「生玉の社司松下氏守護す。慶長年中に勧請せり。城中の諸士此所にて弓馬を学ぶ。今五月五日の流鏑馬は此遺風なりといふ」とあるのは、『撰津名所図会』巻三「北向八幡宮」項の「生玉の社司松下氏守護す。勧請の初めは、慶長年中、城中の諸士、此地に於て射御の稽古場によつて、八幡宮を勧請しけるなり。今五月五日の流鏑馬は、此遺風なり」との記述による。同日の生玉神社の記事に「末社北の方、天照皇太神宮・豊受皇太神宮・大己貴命・事代主命・少彦名命、南の方、八幡宮・住吉社・巖島社・金毘羅権現なり。本地堂・大師堂・太子堂・聖天の社あり。南坊を志宜山法案寺といふ。社頭の北にありとぞ」とあるのも、巻三「難波坐生国国魂神社」項に見られる、以下の記述の傍線部を要約したものである。

末社 北の方、天照皇太神宮・豊受皇太神宮・大己貴命・事代主命・少彦名命、南の方、八幡宮・住吉社・巖島社・金毘羅権現。

本地堂 本尊薬師如来を安ず。聖徳太子御作。

大師堂 石像。弘法大師自作の影なりとぞ。

聖天祠 境内南向にあり。

南坊 社頭の北にあり。社僧貫主とす。真言宗。志宜山

法案寺と号す。

このような利用態度は、『蘆の若葉』の各所に散見されるが、四天王寺や住吉社をはじめとする寺社の縁起・由来などの記述に、とりわけ多く見られる。

ところで、『蘆の若葉』の記事には、前章で述べた名所案内記類以外にも、書名を明記している箇所がいくつか見られる。四月五日の江口では「撰集抄」、四月八日の四天王寺では「つれ／＼草」、七月七日の猪甘津橋では「仁徳記」、九月十三日の住吉社では「拾介抄」の名が、それぞれ挙がっている。しかし、これらを鵜呑みにするわけにはいかない。結論から先に述べれば、これらはいずれも『撰津名所図会』の引用文献なのである。内海論文では「四天王寺法筵略記」「住吉詣の記」のみの指摘に止まるが、管見の限りでは、これに上記の四例を加えることができる。例えば、四天王寺の鐘楼についての記事では、「つれ／＼草に、寒暑に随ひて、あがりさがり有べきゆへに、二月涅槃会より聖霊会までの中間を指南とす。秘蔵の事なりとみへし」とあるが、これは『撰津名所図会』巻二「荒陵山四天王寺敬田院」の「鐘楼」項に見られる「つれ／＼草云」で始まる文章の一部を引用したものである。また、住吉社の相撲会についての記事では、「拾介抄に、九月十三日相撲会とあり」とあるが、こ

れも『撰津名所図会』からの引用で、巻一「九月十三日相撲会」に見られる「拾介抄に曰く、九月十三日相撲会云云」をほぼ丸取りしたものである。

南畝の『撰津名所図会』利用は、本文だけに止まらず、挿絵にも及んでいる。例えば、四月八日に孔雀茶屋を訪れた際の記述に、

錦雞・白鵬・灰鶴・孔雀マナヅル三雄ニ雌などあり。大きにひろき籠に

いれたり。高麗雉かへる。籠のうちに黄楊の木などうへてかくれ所とす。籠の前なる欄の中に羊をかひ置り。奥のか

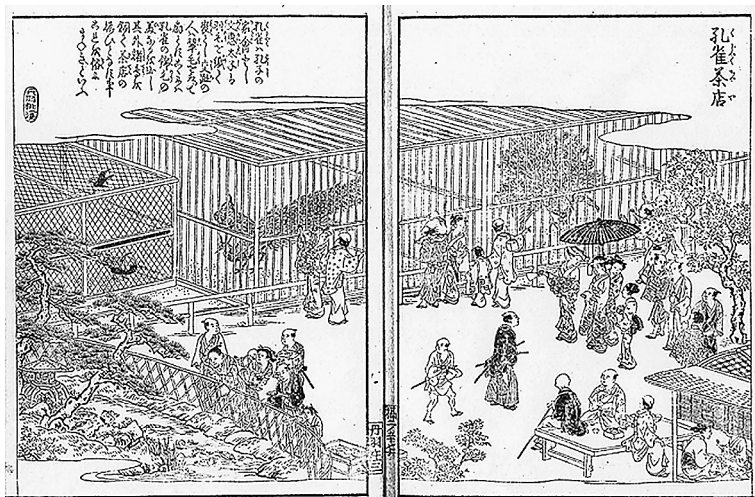
たに池あり。杜若・菖蒲・萍蓬カキホネ処えがほなり。葦簀張の茶

屋、たてつゞけて人々いこふ。江戸の花鳥茶屋に似たり。

とあるが、これは『撰津名所図会』巻二の挿絵「孔雀茶店」【図3】の様子を、実体験に基づいて述べたものである。傍線を引いた箇所と挿絵を見比べてみると、内部の様子がよくわかると思う。また、孔雀茶屋の場合、挿絵は描かれていても、本文に内容の説明がないので、南畝の記述は、孔雀茶屋の實際を伝えるものとして貴重である。同様の例は、三月二十六日の松屋、四月二十一日の真田山などの記事に見える。

また南畝は、挿絵に付された言葉についても、目配せを怠っていない。例えば、三月二十五日に浦江村を訪れた際に「名所図会に、浦江村、杜若の名所とあり」と記すが、これは『撰津



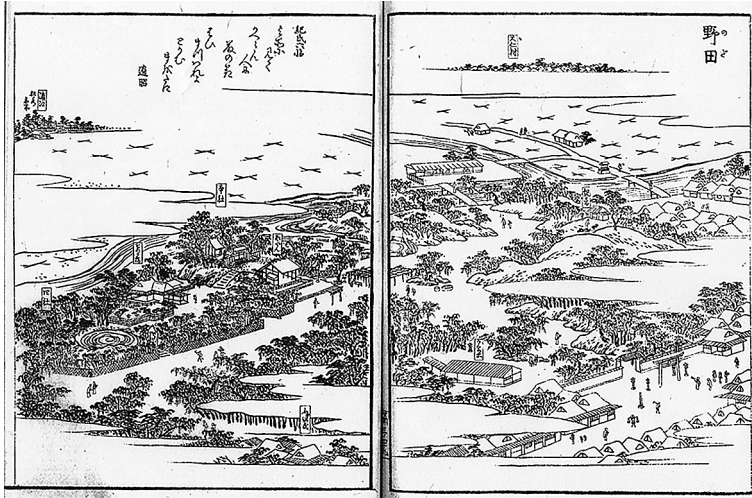


【図3】『撰津名所図会』巻二「孔雀茶屋」

(関西大学図書館蔵)

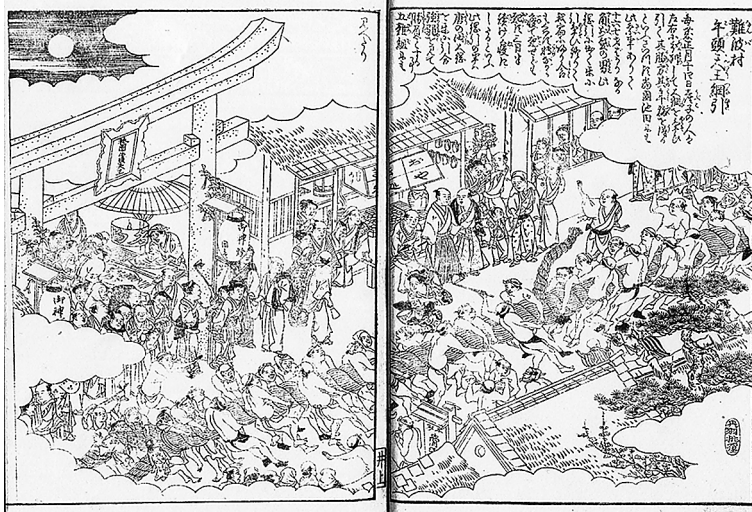
名所図会』の本文ではなく、巻三の挿絵「野田」【図4】の左端に、「浦江杜若名所」と小さく書かれた部分を指している。また、四月十四日に訪れた難波牛頭天皇社の綱引神事について、「毎年正月十四日、綱引とて左右にわかれて大綱を引あい、引かちたるかた幸ありといふ」も、巻三の挿絵「難波村牛頭天王綱引」【図5】の上部に記された「毎歳正月十四日、産子の人々左右に分別して、大綱を争ひ引て、其勝方、其年福を得るといふ」を引用している。さらに、六月二十四日には、天満宮の夏祭りを使用されるだんじりを見て、「だんじりはもと河内の菅田祭より始り、尾州の津嶋祭熱田祭にもありと、名所図会にはしるせり」と記すが、これも巻四の挿絵「夏祭車楽囃子」【図6】の左上に記された「車楽は旧河内国菅田祭よりはじまりて、今は尾州の津嶋祭にもありて、船にてめぐり囃し立る也。又、熱田祭にもあり」をふまえたものである。

このように、本文・挿絵を通して、南畝は『撰津名所図会』を縦横無尽に利用しており、他の名所案内記類とは一線を画している。それは、同書の現地取材に基づく緻密な考証に、彼自身、格別の信頼を置いていたからで、「名所図会にくはし」といった記述からも窺える。以上の考察をふまえて、次章では、あらためて「名所図会」という書物が果たした役割について考えてみたい。



【図4】『摂津名所図会』卷三「野田」

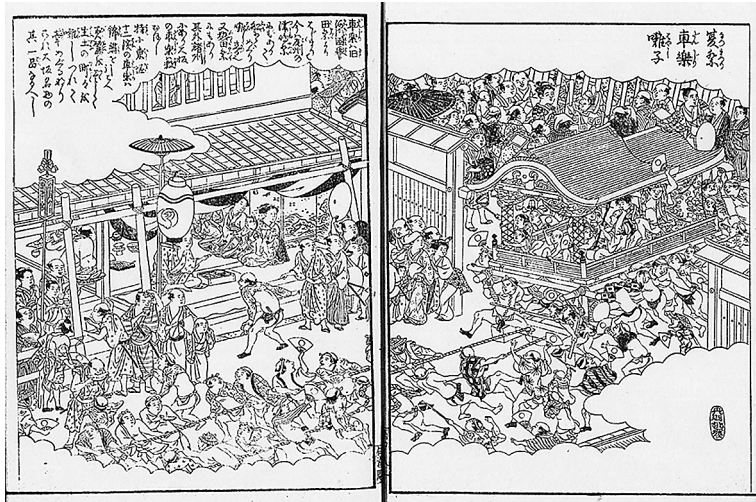
(関西大学図書館蔵)



【図5】『摂津名所図会』卷三「難波村牛頭天王綱引」

(関西大学図書館蔵)





【図6】『撰津名所図会』 卷四「夏祭車楽囃子」

(関西大学図書館蔵)

#### 四、「名所図会」の役割

元来、名所について記した書物としては、『京董』（中川喜雲著、明暦四年〔一六五八〕刊）や『東海道名所記』（浅井了意著、万治年間〔一六五六～六一〕刊）などの「名所記」が知られているが、これらは紀行文学の要素が強いものであった。<sup>18)</sup>その後、『京羽二重』（水雲堂孤松子著、貞享二年〔一六八五〕刊）や『江戸砂子』（菊岡沾涼著、享保十七年〔一七三三〕刊）といった実用的な案内書が続々と生み出され、やがて、それらに含まれていた諸要素に、美しい挿絵を加えた「名所図会」へと発展する。つまり、「名所図会」は旧来の名所案内記類の集大成に位置付けられるのであり、それによって、名所に関する情報を網羅的に得ることができる。例えば、四月二十六日に住吉社を訪れた南畝は、境内にあるさまざまな情報を『撰津名所図会』巻一から確認している。この日の行動範囲は天下茶屋と住吉に限られているので、巻一のみを携帯していた可能性も考えられる。

一方で、「名所図会」だけが持ち得る独自性も見逃せない。それは、多く挿絵とともに紹介される、祭礼・民俗行事・庶民生活・古伝承といった情報である。三月二十六日に訪れた松屋という茶店や、四月五日に訪れた大長寺境内にある鯉塚など、現

地に足を運ばない限り知り得ない情報が、『撰津名所図会』には数多く記載されている。南畝自身、こうした情報がなければ、訪ねることもなかったであろう。

これらを考え合わせると、「名所図会」は旧来の名所案内記に見られた情報は勿論のこと、その土地土地における最新の情報をも網羅した、総合的なガイドブックと言える。とはいえ、かなり大ぶりの書物であるため、冒頭で述べたように、実際に携行するのではなく、机上で楽しむというのが一般的であった。よって旅行者は、まず事前に「名所図会」の記述や挿絵によってイメージを膨らませ、名所を《疑似体験》していたのである。そして、南畝のような考証とまではいかないだろうが、日記（旅行記）などを書く際の参考書としたことは想像に難くなく、名所の《追体験》も同時に行われていたと推測される。このように、「名所図会」をふくむ名所案内記類の役割について考える場合には、実際の旅を想定することが肝要であろう。

### おわりに

以上、大田南畝の在坂日記『蘆の若葉』の記述をもとに、『撰津名所図会』をはじめとする名所案内記類の利用について考察

してきた。『蘆の若葉』には、「名所図会」「撰陽群談」「難波鑑」などの表記が見られるため、従来、それらの利用について言及されてこなかったわけではない。しかし、詳細に分析した結果、書名が明記されていなくとも、何らかの形で利用されていることが新たに確認された。また、単純な利用に止まらず、名所の由来について、諸書を比較して考証する姿勢も窺える。それは、文字情報のみに頼るのではなく、絵画資料をも視野に入れたものであった。

このような名所考証に際して、南畝が最も信頼を寄せたのが、他ならぬ『撰津名所図会』であった。旧来の名所案内記類の記事を集成し、かつ美麗な挿絵を備え、そのうえ現地取材に基づく土地土地の最新情報が盛り込まれた本書は、まことに至便のガイドブックと言える。そして、南畝の記述をふまえて「名所図会」の役割を考えたとき、事前に《疑似体験》し、実際の体験を経て、あらためて《追体験》するという、一連の流れが浮かび上がってくるのである。ただ、本稿で述べたような事例に、普遍性が認められるか否かについては、より多くの作品（紀行文など）を検討したうえで判断しなければならない。今後の課題としたい。

〔注〕

(1) 横山邦治『読本の研究―江戸と上方と―』（風間書房、一  
九七四年四月）。

(2) 以下、南畝の動向については、玉林晴朗『蜀山人の研究』  
（畝傍書房、一九四四年六月）、浜田義一郎『大田南畝』（吉川  
弘文館、一九八六年八月「新装版」）などを参照した。

(3) 拙稿「馬琴と大坂―『月水奇縁』成立に関する一考察―」  
（『国文学』（関西大学）94、二〇一〇年二月）で南畝の交遊関  
係について略述したが、飯倉論文に言及すべきであった。記  
してお詫び申し上げる。

(4) 享和元年六月七日付山内穆亭宛書簡には「毎朝辰牌より  
未牌までは役所に罷在候」（『大田南畝全集』第十九卷「岩波  
書店、一九八九年三月」とあるので、毎日午前八時から午後  
二時まで、銅座に勤務していたことがわかる。

(5) 享和二年（一八〇二）の馬琴の上方旅行に際して、南畝  
は彼らへの紹介状（同年五月六日付、『馬琴書翰集成』第六卷  
「八木書店、二〇〇三年十二月」所収）を認めている。

(6) 享和元年八月五日付大田定吉宛書簡（注4前掲書）。

(7) 銅座での公務の様子については、『銅座御用留』（『大田南  
畝全集』第十七卷「岩波書店、一九八八年四月」所収）に詳

しく記されている。

(8) 日付・探訪地の順に列記した。探訪地の表記は、できる  
かぎり原文を尊重したが、一部あらためた箇所がある。なお、  
注記すべき事柄がある場合は、（ ）内にそれを記した。

(9) 前掲『大田南畝全集』第八卷「解説」、飯倉・内海論文など。  
(10) 『大田南畝全集』第八卷。以下同。

(11) 関西大学図書館蔵本。なお、引用に際しては、通行字体  
に改め、適宜句読点を付した。以下、原本からの引用は、す  
べてこの方法による。

(12) 多治比郁夫・日野龍夫「解題」（『校本難波丸綱目』中尾  
松泉堂書店、一九七七年十一月）。本文の引用も同書による。

(13) とくに「土砂をあつめて山となし、川口をたすく」とい  
う記述は、「瑞見山」項の「瑞賢此川條を掘りし時、土砂を  
こゝに上げしめ、川口を助く」からの引用が明らかである。  
以下、「撰津名所図会」の引用は、すべて関西大学図書館蔵本  
による。

(14) 滝本誠一編『日本経済大典』第四卷（啓明社、一九二八年）。

(15) 国立国会図書館蔵『南畝文庫蔵書目』（書誌研究会編『蜀  
山人蔵書目録』ゆまに書房、一九八四年三月）に、「みをつく  
し 一卷 天明三年 外副本一卷」とあるので、南畝が利用

した『みをつくし』は天明三年（一七八三）版ということになる。以下、『みをつくし』の引用は、関西大学図書館蔵本（天明三年版）による。

(16) 関西大学図書館（鬼洞文庫）蔵本。曲亭馬琴『鞆旅漫録』卷之下「住吉附難波屋の松小町茶屋」（享和二年成）にも、「松のかたちを紙にすりてうるなり」（『日本随筆大成』（第一期）1、吉川弘文館、一九七五年三月）とある。

(17) 関西大学図書館（鬼洞文庫）蔵本。

(18) 神谷浩「名所図会」（国際浮世絵学会編『浮世絵大事典』（東京堂出版、二〇〇八年六月））。

（なかお かずのり／奈良大学講師）